

支援者ヒアリング 実施結果

1 保護者が抱える課題等

<子どもへの接し方等>

- ・ 保護者の表情や態度が硬いと、それが子どもにも伝わってしまう。
- ・ 子どもの褒め方、叱り方が分からず、他人の見ていない前で子どもを叱りつけてしまう。
- ・ 子どもに障がいがある場合、どのように接したらよいか分からない。
- ・ 自分自身の親（母）との関係が整理できていない人は、子育てが苦手で子どもへの接し方が分からないという事例が多く見受けられる。
- ・ 10代など若年齢での出産の場合などで周囲に子育ての手本となるような人がいなかったりすると、子どもの育て方が分からなかったり、子育てが上手にできないこともある。

<周囲との関わり>

- ・ コミュニケーションが苦手で、相談したり悩みを話せる相手が限られていたり、周囲に協力を求められる人がいないなどの理由で孤立してしまうと、産後うつに陥りやすくなる。
- ・ 困っている人は、その様子を周囲には見せない。ただし、一見周囲と関わりたくなさそうな雰囲気を出していたとしても、本当は話を聞いてほしいという場合もある。
- ・ 子育ての不安を一人で抱え込むケースが増えている。

<保護者自身が困難を抱えている場合>

- ・ 自らが病気や精神疾患を患っている場合、それにより就労が困難となる。
- ・ DV経験等がある場合には、その影響により精神的に不安定になりやすい。
- ・ 仕事をしているにも関わらず収入が少ない。特に母子家庭でその傾向が強い。
- ・ ひとり親家庭の保護者は、非正規雇用で働いていることが多い。また、生活費を得るために、ダブルワーク、トリプルワークをしている。
- ・ 保護者自身の生活に乱れがある場合には、生活習慣や金銭管理、毎日の食事など、日常の生活面について子どもに教えることができない事例も多い。
- ・ 就学資金を子どもの教育以外に使ってしまったたり、子ども手当を衣服や生活資金として手をつけるなど、自分の生活中心にお金を使ってしまう。

<行政の支援策や子どもの教育についての理解>

- ・ 行政や民間の支援策について知らなかったり、知っていても支援に繋がりがたらない事例が見受けられる。
- ・ 子どもの発達遅れや発達障がい等に関する理解が不足している場合があり、その結果、子どもの障がい等に気付かず、発見・対応が遅れてしまう。
- ・ 子どもの教育や進学への意識が低く、奨学金等の支援制度について知らない場合がある。

- ・ 保護者自身が中卒、高卒の場合、子どもにも中学校・高校を卒業したら働いてほしいと考えていることもある。

2 子どもが抱える課題等

<対人関係や親との関係>

- ・ 表情が硬く、常に親の顔色をうかがっていたり、褒められることに慣れていない。その反面、些細なことでも褒められるとすごく喜ぶといった場合がある。
- ・ 自分に自信がなく、自己肯定感が欠如していたり、対人関係が苦手で、大人を怖がる子どもがいる。
- ・ 自分の感情を表現することが苦手で、コミュニケーションが上手く取れない。一方で、対人面で積極的になり過ぎて上手くいかないこともある。
- ・ 教育や進路のことで親に相談できない子どもがいる。
- ・ 貧困の状態にあっても、同世代には知られたくないと思っているなどの理由により、自分からは家庭の貧困について口にしないことが多い。
- ・ たとえ親からの虐待を受けていたとしても、他人の前では親を守ろうとする傾向があり、自分からはSOSの声を上げられない場合がある。
- ・ 子ども同士でいるうちは、家庭環境や境遇の違いはあまり意識していないように見える。
- ・ 学習支援の場に行くことができている子ども同士の結びつきは非常に強いものがあると感じる。

<健康面>

- ・ 家に引きこもりがちで運動不足となる子どもや、虫歯が多い子どもが見られる。
- ・ 困窮している家庭では、高校生になると給食がないため、栄養不足になる場合がある。
- ・ 健康面での不安から、うつ病や統合失調症などの精神疾患を患うこともある。

<日常生活>

- ・ 親の不規則な生活に付き合い、自らも生活リズムが作れず、基本的な生活習慣が身につけていない場合がある。
- ・ 常にお腹を空かせていて、イベント等でお菓子が出るとがつがつ食べる様子が見られることがある。
- ・ 衣服が汚れていたり、季節の変わり目で衣服が変わらない場合や、散髪に行けず、髪が伸び放題になっているといった事例が見られる。
- ・ 経済感覚に乏しく、お金の使い方を知らない子どもがいる。
- ・ 明日食べるものがないという状態の子どもは、ほとんどいない。
- ・ ゲームや勉強道具は与えられており、物質的な剥奪状況はさほど見られない。

<居場所>

- ・ 家にも学校にも居場所がないという感覚から、不登校になったり、ネットカフェに通っている子どもがいる。

- ・ 学校や職場等、決まった「所属」がないことへの不安を抱えている場合がある。
- ・ 家族の中に自分を応援してくれる人がいないと感じている子どもがいる。
- ・ 学習支援の場に来る子どもは、勉強をしっかりとやりたいという子どももいるが、誰かがいる空間を求めて来る子どももいる。

<学習環境、進学・就職>

- ・ 家に勉強部屋がないなど、学習できる環境が整っておらず、学習の習慣が身についていない子どもがいる。
- ・ 学校からの案内が親の段階で止まっているなどで、進学や就職に関する情報が得られない。
- ・ 身近に適切なモデルがいないために、進学や就職に対するイメージが持てないことがある。

3 世帯が抱える課題等

<子育て世帯の孤立>

- ・ 核家族化の進展の影響により子育ての知恵が伝承されていなかったり、親族から育児の協力が得づらい環境になっていると感じられる。
- ・ 未婚・離婚等によるひとり親家庭が増加し、育児・生活の協力者がいない家庭が多い。
- ・ 親同士、親と保育園・学校との関わりなどにおいて、人間関係が希薄になっている側面がある。
- ・ 困難を抱えている家庭であっても、見た目には他の家庭と変わらない場合も多く、外から気付くことが難しい。
- ・ 子どもの各種検診に来ない。また、呼びかけを行っても拒否的な家庭がある。

<家庭内における課題>

- ・ 親子間のコミュニケーション不足や育児放棄等があり、家族として機能していない家庭がある。
- ・ 家庭内暴力の面前DVの被害を受けた子どもは、同じように、子どもが家庭内で暴れてしまう事例がある。
- ・ 父親が子どもに対して厳しく接する。しつけが言葉による暴力、身体的暴力に発展する場合もある。
- ・ 子育ては母親が主体で、父親像が見えてこない家庭もある。

<経済面>

- ・ 特にひとり親家庭は、経済的な困窮状態にある世帯、生活保護受給世帯が多い。今をどうにか生きることに精一杯で、将来にまで考えが及ばないように見える。
- ・ 困窮している家庭では、給食費の滞納があったり、修学旅行の費用が出せなかったりする。
- ・ 障がいの認定もなく、生活保護も受けていない「ぎりぎりの家庭」が一番苦

しい状況にある。

<生活習慣>

- ・ 親子で食事をする機会がなかったり、子どもが手作りの料理を食べたことがない。
- ・ 親が子どもに夕食代としてお金を渡し、子どもがコンビニで菓子ばかり買って食べるような家庭もある。親子ともに、それが良くないという認識もない。
- ・ 生活保護等、一定の行政支援を受けている世帯では、金銭面よりもむしろ食事等の生活面の乱れが深刻になっていると感じる。
- ・ 親がちゃんとした生き方を見せていれば、子どもはそれを見て成長する。逆の場合だと、困難な状況が親から子どもに引き継がれ、その子が親になったときに再び困難が生じ得る。
- ・ 親子そろって課題を抱えているケースが多く、子の抱える課題の多くは、親が原因で生じている。

4 支援にあたっての課題等

<支援につながらない人、相談できない人への対応>

- ・ 病気や障がいのある場合は、何らかの支援を受けられるが、そうした支援につながらない困っている人にどう手を差し伸べるか。そういう人たちは、自分の中で悩みを抱え込み、支援につながった時点で、自立や社会復帰が難しい状況になっている場合もある。
- ・ 支援機関に相談に来る人は、交通費の支出もできる、あくまで「相談に来られる人」であり、本当に支援が必要な人の中には、相談に行けない人もいる。
- ・ 本人が貧困状態を表に出さないため、何となく困っている状態が見えていても、積極的に手を差し伸べることができない。
- ・ 困難を抱えている人の中には、区役所の相談窓口に行きづらさ、ハードルの高さを感じている人もいる。

<施設・制度を離れた後の支援>

- ・ 支援施設を退所して連絡が取れなくなる世帯については、問題が解消されたのか、あるいは相談できない状態なのか判断がつかない。つながりの切れてしまった世帯へのフォローは難しい。
- ・ 児童福祉施設を退所した後も、近況報告や相談で施設を訪れる子どもとはつながっていられるが、「退所したのに頼ったら申し訳ない」と感じる子どももおり、連絡がつかなくなるとフォローが難しい。
- ・ 生活保護が廃止になった場合、世帯のその後についてはフォローできない。

<世帯全体への支援>

- ・ 現行制度は支援の対象が年代や家庭環境で区切られてしまうものが多いが、困難を抱える世帯は短期間で課題が解決することが少ないため、長期にわたって継続的に関わり、世帯ごとに支援していく必要がある。

- ・ 「子どもの支援」、「親の支援」と分けて考えるのではなく、世帯全体をまとめて支援する視点が求められる。
- ・ 現行の支援制度は「子どものみ」、「親のみ」の形がほとんどであるが、子どもと離されることに抵抗のある親も多いため、親子を一緒に支援できる制度があるとよい。

<生活習慣>

- ・ 困難を抱えている世帯では、基本的な生活習慣の習得が軽視されている場合がある。そうした世帯の子どもたちの成長を考えると、家庭以外でモデルとなる大人と関わる機会が大切であり、親のみ、先生のみとの関わりだけでは不十分であると考えられる。
- ・ 一汁三菜といった「普通の食事」を知らない子どもがいる。お金がなくて食べられないわけではないため、食育への理解が課題であると感じる。
- ・ 生活保護費や各種手当が、子どものために使われていない状況がある。本来、学費や食事に当てるお金を嗜好品やギャンブルに使ってしまい、その影響を子どもが受けることになる。
- ・ 経済面だけではなく、子どもに選択肢が少ない、自分の将来をイメージできない等、精神面の貧困を感じることもある。
- ・ 行政の支援を受けることができれば、経済的には困難を脱出できる場合が多く、精神的な困窮の方が深刻であるともいえる。

<進学や就職>

- ・ 経済的に困窮している世帯では、進学したいが、学費が必要なためアルバイトに追われ、勉強時間が確保できないという子どもが多い。
- ・ 学業のために受給している奨学金であるが、貸与型の場合、返済のために仕事をかけもちした結果、朝起きられなくなるなど、学業に影響が出たり、困難の先送りのように感じる場合がある。
- ・ 児童養護施設を出た子どもは、一般の子どもに比べて進学率が低かったり、仕事に就いてもなかなか定着しないという課題がある。

<情報の伝達>

- ・ 生活保護世帯や特定の支援を受けている世帯への学習支援はあるが、周知が徹底されておらず、支援の場に来てほしい子どもや支援が必要な子どもにまで情報が行き渡らない場合もある。
- ・ 行政におけるセーフティネットは、たくさんあるようで案外知られておらず、生活保護や就学援助を知らない人も多い。

<人材・資金確保>

- ・ 民間の支援機関では、利用者の増加等により、慢性的な人手不足に陥っており、施設退所後のアフターフォローをしたいと思っても人手が足りない。
- ・ 個人経営の場合、後継者の問題が常につきまとう。
- ・ 学習ボランティアが集まらない。学習ボランティアをやりたいと思っている学生はたくさんいるはずだが、どうやったら一歩踏み出してもらえるのか、アプローチの方法を考えなければならない。

- ・ 利用者にアドバイスする際や、行政やその他の支援機関に同行する際に、最低限のソーシャルワークの知識が必要になるが、そうした知識を持つスタッフが少ない。
- ・ 保育園や学校においても、ソーシャルワークのスキルが必要になってきている。
- ・ 学校は家庭の内部まで立ち入ることができず、SSW（スクールソーシャルワーカー）やスクールカウンセラーが頼りとなるが、絶対的に人数が足りないと感じる。
- ・ 保育士、SSW、家庭児童相談員等、最前線で支援する人たちがオーバーワークのため、すべてに目を配ることができない。
- ・ 居場所事業や学習支援事業について、ほぼ慈善事業として行っている場合には、寄付等で何とか成り立っているなど、民間の支援機関では、常に資金面の不安がある。

<関係機関の連携>

- ・ 幼稚園・保育園から小学校への情報提供はあるが、保健師から小学校への引継ぎは不足しているように感じることもある。
- ・ 生活保護世帯の子どもについては、区役所保護課のケースワーカーともっと情報交換ができればよいが、現行制度では難しい面もある。
- ・ 民間の支援機関では、学校や区役所保護課、児童相談所との連携の機会がもっと必要だと感じている。
- ・ 学校の担任の先生は、毎日子どもと接している中で、子どもの変化に気付く機会が多いので、担任の先生と他の支援機関との情報共有が重要であると考えられる。
- ・ 札幌市はNPO法人の利用に関して慎重なイメージがある。もっとNPO法人を積極的に活用するべきではないか。
- ・ 行政から届けられる情報が少ない。
- ・ 行政の支援を受けられない人が頼ることができるのは、民間の支援機関であるが、現状では支援機関同士の連携が不十分だと感じている。

<行政手続き>

- ・ 区役所など行政機関の手続きが煩雑であり、難しい。支援が必要な人であっても、ひとりで手続きできないため、施設職員が付き添うことも多い。区役所窓口の一本化、もしくは全体を案内してくれる人がいると助かる。
- ・ 施設職員が同行してようやく区役所などに足を運ぶということもあり、もっと早く支援につながることであったのではないかと、もどかしさを感じることもある。
- ・ 札幌市の補助金、貸付金等の使い勝手をもっと良くしてほしい。

5 今後必要となる支援

<地域で子どもを育てる取組>

- ・ 困っている人が一人で抱え込まずに、困っていることを自ら発信し、周囲に理解してもらい、助けてもらえるような環境が望ましい。
- ・ 地域全体で子どもを見守る、育てる仕組みづくりが必要である。また、地域において、困っている子どもや世帯を発見できるよう、広くアンテナを張るような体制が望ましい。
- ・ 地域で気軽に話を聞いてもらえるような場所が必要である。
- ・ 地域に子どもと大人が関われる場所があることが望ましい。
- ・ 児童会館や町内会が、子どもと地域がつながる場になると考えられ、特に児童会館は、子どもが小学校のときから地域とつながることができる貴重な場所なので、もっと有効活用できれば望ましい。
- ・ 家庭や学校で自分の居場所を見つけられない子どもたちには、行かなければいけないという義務感のある場所ではなく、行きたいときに気軽に行けて、ゆるくつながっていられる居場所・逃げ込み場所となる第3の居場所が今後重要になってくると思われるので、各地域に必要である。

<日常生活や精神面の支援>

- ・ 生活保護などの経済面の支援の他に、生活面の支援や精神相談など、親の自立に向けた支援が必要である。
- ・ 本来は自分の親や周囲の大人を見て学ぶべきことが身につけていないケースがあるため、日常生活を送るうえでの必要な知識や生活習慣等を学ぶことができる、親向けの講座や勉強会があると良い。
- ・ 子どもの貧困という側面に対してだけでなく、親への精神面を含めたサポートが必要である。

<進学や就労の支援>

- ・ 高校卒業時の支援が重要であり、学習の支援とともに、大学進学費の給付があると良い。
- ・ 児童養護施設に入所している子どもに対しては、退所後の生活や大学進学等への支援が重要になる。
- ・ 児童養護施設や自立援助ホームを退所した子どもで、精神疾患を患っている場合、見た目では判断できないために、職場で理解されずいじめ等につながるケースもある。理解のある職場や、ゆっくりと就労に慣れていける仕組みがあると良い。
- ・ 義務教育段階では、子どもに食べさせるといった支援で良いかもしれないが、高校生の段階では、就労支援など、社会的自立に向けた支援が重要となる。
- ・ 奨学金の返還免除制度を設ける、あるいは返還するとしても、無利子の奨学金を推進すべきではないか。

<親への適切な情報提供>

- ・ 普通学級でうまくいかなかった生徒が、特別支援学級に移ってうまくいった

ケースもある。親に対する適切な情報提供や選択肢の提示が必要である。

- ・ 親の無関心が子どもの困難を大きくするので、親への適切な対応が必要である。

<福祉人材の確保・社会資源の活用の取組>

- ・ スクールソーシャルワーカーの増員など、福祉的な立場の人がたくさんいて動けるようになると良い。
- ・ 幼児教育に携わる人材がもっと増えると良い。
- ・ 特定の制度や手当に頼るのではなく、健康な高齢者に子育てに参加してもらうなど、既存の社会資源をもっと有効活用できる仕組みがあると良い。